

## 文体とバターのようなものいまは亡き知的グルメの感性

“文は人なり”とか。文章には、それを書いた人の“人となり”がおのずと表われるという謂われである。

この場合、文とは書かれた文章の意味や内容ではなく、それをどんな調子やリズムで語っているかという“文体”のことだが、その文体も、人まねはいざ知らず、その人をおいて他の人ではぜったい真似のできない文体を身につけるとなると、男が子供を産むより難しい。が、それをいとも巧みに語ってみせたのが、いまは亡き吉田健一氏（英文学者、評論家、吉田元首相の息子）だった。

この知的感性の持ち主は、かのイソップ物語になぞらえて、こういのである。

“蛙を二匹、牛乳を入れたカメに落としたりとする。どうあがいたところで助かる見込みはなく、一匹は、そのうち力尽きて死んでしまう。が、もう一匹は、辛抱強く努力しているうち、自分の足で牛乳がかきまわされたため、それがいつの間にかバターになっていたのである。この蛙はそれを見て、バターが自分がカメから飛び出す足場になったことを発見する。文体、ないしは文学というものも、結局のところこのようなものではないだろうか”

牛の乳の結晶であるバターに、これほど精神的な、意味を読み取った入をほかに知らない。



吉田氏は、生前、文学とグルメを独特の感性で連結させたユニークな人として、知る人ぞ知る存在だったが、腹をこわしたときの夢想とことわり書きした文章で、この人が食べ物にたいしてどんな態度で向き合ったか、当節のグルメ気取りの人間などには及びもつかない透徹ぶりをみせている。念を押しておく、吉田氏は、

この空想にとらえられたとき、食べ過ぎか飲み過ぎで腹をこわしていた。それでいて、こんな空想に遊ぶことができたのだから恐れ入る外ない。

——ともかく、牛一頭を丸焼きにする。牛が焼けたところで、私、あるいは主人公は、ビニール製の防水服を身につけて牛の内部にもぐり込む。そしてこんがり焼き上がったレバーの上に寝転がって、ヒレであれ、ロースであれ、手当たりしだいに食べたいところを口にする——というすさまじくも優雅な夢である。

いまどきのグルメを売りものにした物書きが、やれどこそこのステーキは“どうだからだろうだ”といった瑣末に目を血走らせているのに対して、吉田氏の食の本質を見る目のなんと確かなことか。